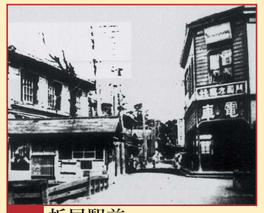
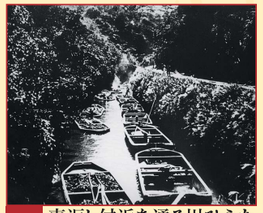
堀川運河の史跡

遠賀川から分かれ、八幡西区楠橋に始まり、中間市、水巻町、そして再び八幡西区折尾を経て洞海湾へと注ぐ運河「堀川」。

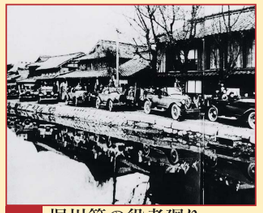
江戸時代の先人達が地域の繁栄と幸福を願い、
幾多の困難を克服し、長い歳月と苦労を重ね人の手でつくられた貴重な遺産です。



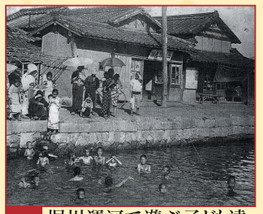
A 折尾駅前
折尾郵便局戦時中移転・大正初期の九軌電車のりば



B 車返し付近を通る川ひらた
水はすみきって川底の砂まで見えていた。



C 堀川筋の役者廻り
堀川筋には、江戸時代より多くの商店が建ち並び賑わいをみせていた。



D 堀川運河で遊ぶ子ども達
昭和10年代・中間市長津
現在の「働く婦人の家」付近

1 川ひらた（県立折尾高校内）
川ひらたは、江戸時代から昭和初期にかけ、米や石炭の輸送に活躍した川船で、玉平太船とも呼ばれました。全盛期には一年に13万隻も往来した川ひらたですが、輸送手段がしだいに鉄道へと移行し、1938年（昭和13年）を最後に堀川から姿を消しました。
県の有形民俗文化財に指定（昭和37年4月19日指定）されており、現存する川ひらたは、この1隻と芦屋町歴史民俗資料館に1隻があるのみです。

3 車返しの切り通し
堀川工事で一番の難所だったのが、車返しとよばれるこの場所の掘削で、ノミの刃は2時間もすると使い物にならなくなり、鍛冶場がつくられたほどで、約400mの距離を約5.4mの幅で掘るのに9年間もかかりました。
現在は、折尾高校から河守神社にかけての岸壁にノミの跡や線刻文字が残り、当時の難工事を物語っています。

5 中間の唐戸
1762年（宝暦12年）藩は、備前の国（現在の岡山県）の吉井川に強固な唐戸が構築されているのを知り、堀川工事の役夫頭（ぶやくがしら）を努めていた一田久作（いちだきゅうさく）を備前に派遣しました。江戸時代は、他藩の調査は許されておらず、冒険的な試みでしたが、無事帰国し、吉井水門を参考に中間の唐戸は完成しました。県の文化財に指定（昭和58年3月19日）されています。

2 舫石（もやいいし）
川ひらたが渋滞したときに、船を一時停めるための穴の開いたイシで、船頭はこれに綱を結びつけ休憩しました。
県立折尾高校下の川沿いに3基のみが現存しています。

4 河守神社
河守神社には、128年間中断されていた堀川工事を再開した福岡第六代藩主　黒田継高（くろだつぐたか）が祭られています。また、江戸時代に描かれた三十六歌仙絵馬も奉納されています。
近くには、旧一田久宅 や 一田家累代の墓があります。

6 寿命（じめ）の唐戸
中間の唐戸が完成し、堀川の通運が開始され流域の村の石高も増えましたが、遠賀川上流の水勢が弱まったため、上流の村にたびたび洪水がおこりました。そのため、1804年（文化元年）、取水口を中間から楠橋に移し、寿命の唐戸が建設されました。これにより堀川運河全線が開通しました。
寿命の唐戸は、中間の唐戸とほぼ同じ構造でつくられており、北九州市の有形文化財に指定（昭和46年4月21日）されています。他に、矢戸口（ナメラ）井堰、山の鼻井堰、屋島井堰の3箇所がありました。

ほりかわ物語

堀川をめぐる数々の物語　ここに昔と今をつなぐ流れがある

その1 「堀川運河」ってなんだろう

遠賀川は、北九州市の福智山から流れ出て、天籟寺、川筋地区の沖積を通って、洞海湾まで続く全長12.1キロメートルの運河。つまり人間が造った川です。

起源（およその年数）になって、福岡藩は、洪水が続く遠賀川の氾濫の大災害工事にあわせて、遠賀川の水を引けて、遠賀郡に流すようとても社会的な計画をたてました。

その計画のやで、遠賀郡川は長い年月をかけてつくられたのです。近世の中ごろ（およそ300年前）からすすんだ遠賀川下流域一帯の新田開発や洞海湾一帯平地工事とつながるとても大切な工事でした。遠賀川の洪水や白魚川の難に苦しめられていた遠賀郡一帯の数万人の農民たちは、福岡藩のこの大工事のために、天下さたらして喜きました。1804年、ようやく遠賀郡川の工事は一応完成しました。

当時の人々は、遠賀郡川のことを「宝川」と呼んだといいます。当時、米作りの用水だけでなく、飲み水や川魚による栄養にも使われる宝物のような川だったからです。

遠賀郡川が蛇行する遠賀川ひらた（明治中期）

その2 暴れん坊の遠賀川

今から、およそ、400年も前のことです。当時の絵地図をみると遠賀川のようすは、うねっていろんなかっていました。遠賀川は、今よりも曲がりくねり、今のような真っ、じょうぶな堤防はありませんでした。

当時の遠賀川は、天候の影響で少しうるさ感を流れていました。地元には、その昔伝説のことを「たがい」と呼び、今でも、当時の堤防の一部が残っています。

そのうえ、遠賀（遠が流うで、海水面が上り寄った状態）になると、満潮の高から、海水が逆行込んでくるので、大雨が続くと、川はすぐにはんらんしてしまいました。

特に、遠賀川河口近くの遠賀郡方や福岡川沿いの天籟地方では、川がいつもはんらんして、海のようになり、村々の人々は水作りができず、とても困っていました。

また、反対に白魚（ひが）が続くと、遠賀川から自由に田畑に水を引くことができず、作物が干ズに枯れてしまい、大きな被害を受けました。

1617年の元和3ごとです。12日間も大雨が続き、天候がおかこったため、遠賀川の河口は、まるで、入海のようにあがたちまりました。

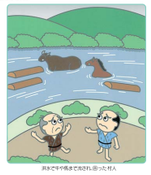
遠賀郡の中間村、新延村、二ヤ村（ゆの二、ヤニ、ゆ石金）、西田村、延栄（延栄）村、新村、古賀村とは、麦、牛や馬、田畑も流されてしまい、村人は田植えもできないで、飢え死にしてしまう者も出たほどでした。ただ唯なる天災に接を痛めた福岡藩は遠賀川を まっすぐにする工事によっるな堤防をつくると工事をすすめていきました。

この遠賀川を改修する大工事は、遠賀郡からのべ十万人の村人をかりだして行われたといわれています。

1613年から、大改修工事は始まり、15年後によりやく完成しました。

それとも、完成した遠賀川の堤防の高さは、わずかタメートル程度（現在の堤防の約半分の高さ）しかなく、洪水を完全になくすことはできませんでした。

あぶる地区附近の蛇行図（日本地理大系より）



洪水でやり残されたおろ田った村人

その3 遠賀川の水を分けて、洞海湾に流す計画

―福岡藩の「堀川工事」の計画―

1620年、福岡藩の藩主黒田長政は、家老栗山大膳と遠賀川やっ地村近の洪水の被害のようすをみて まわりました。

福岡藩にとって、来どこちの遠賀平野は、とても重要な地域でした。

そこで、福岡藩は、遠賀川の洪水被害をくいとめるための工事の計画をたてました。

中間村から、船尾村長崎まで、遠賀郡川を渡り、遠賀川の洪水の時の水の勢いと水量をへらす。百石ばて、かんがい用水として利用すれば、洪域周辺の田畑に水を引くことができる。

そのは、まさに一石二鳥の計画でした。福岡藩は、有識の石高を あげたいというおもいもあり、村人たちの難しい洪水や田畑りの被害をなくして、安心して米作りができるようにしたいということでした。

遠賀郡川が遠賀郡川の洪水のようすを視察（堀川ひろみより）

その4 堀川運河の工事が始まった

1621年1月14日、遠賀郡川の工事がようやく始まりました。

福岡藩の家老（栗山大膳）が藩政責任となり、その工事の指揮にあたりました。

福岡藩の役人たちは、村々にこれから始まる大工事のために、天籟の村人を集（ほん）めるように、「工大工事をする人」としたせようこ きびしく命令しました。

村人たちは、朝まだくらいうちから、「くわ」をふるい「もっこ」と土を運んで働きました。この工事は、毎年、旧暦2月から4月まで の、つまり、田植えや稲刈りなどの農繁を除いた時期におこなわれました。

だから、かりだされた人々は、冬の寒さや雪の降るときたかいながらも、遠賀郡川の工事をほとんど手作り（お金などをちからはないで者べ ることで続けました。

かりだされた村人は一日百人程度で、薫から選れてごられた、薫かかえの（藤夫）と呼ばれる（石工）（固い岩などを掘る職人）とともに働かされました。この工事には、のべ約万人の村人が働かされたと考えられています。

村人たちは「わしらの田んぼができるのだ」と思いながら働きました。

もっこを運ぶ、工大藤（ほん）たち（堀川ひろみより）

その5 堀川運河の工事の失敗

―天籟はどうしてできたのか―

遠賀郡川の工事が始まって、2年目のことです。天籟の西田村の「貴船神社」近くの「百ノ尾」の谷間の工事にさしかかりました。

ところが、この場所は、特別な地質で、雨が降れば、どろ水が工事中の川に流れ込み、今日掘りおけた日才次の日には、埋まってしまうひどしました。

遠賀郡川の工事にかりだされた村人たちも疲れきっていました。

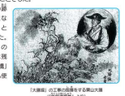
また、工事中に死んだり、ケガをしたりする人が出てきました。

「貴船神社のたたり」だと村人たちは騒ぎました。

村人たちとっては、1年のうち半分ちかくも遠賀郡川の工事にかりだされるうえ、死人やけがんが出たため、不満だ たまっていました。

ちょうどその頃、藩主の黒田長政が亡くなり、遠賀郡川の工事は中断されました。さらに、長政の息子黒田忠之が亡代目藩主になりましたが、堀川工事の責任者栗山大膳と意見が対立し、遠賀郡川の工事は再開されませんでした。したがって、遠賀郡川の工事は、結局中止されてしまいました。それは、1623年のことでした。

貴船神社付近の工事の場は、水びたぎり、藩主となり、いつしか「大藤場」と呼ばれるようになりました。今でも、「藤夫のたかい」の線跡のところにその跡は残っています。また、「大藤場」「大藤」などの地名が今も使われています。



「大藤場」の工事の指揮を執る栗山大膳（沼尻武雄画）より

その6 再び堀川運河の工事がはじまった

中止されていた遠賀郡川の工事は、1708年に天籟郡川は宝永と改元がおこなわれていましたが藩主は綱吉の命令のために中止になってしまいました。

春夏の大きさ水の後、福岡藩内の村々は、とてもひどい状態が続いていました。遠賀川付近の村々は、水田はあっても、石高が上がることがなくなり、また大雨が続くと堀川がおこ つかってくるっ しまったのでした。

福岡藩は、とても悲しい藩の殿様を立て直すために、藩の収入を増やそうと新田の開発を進めていきました。1737年にも、水巻郡代官のルートで遠賀郡川の工事が再開されましたが、途中で、1739年にはやはされてしまいました。

洪水運河地区の平和工事を進めてきた福岡藩では、新田開発のための農業用水の確保はとても重要で、急がれることでした。

そのため、中止されていた遠賀郡川の工事が再び始められました。

それは、1750年のことでした。遠賀郡川の工事は中断されてから128年後のことでした。

福岡藩では、今度は、「福岡交流」を前提（遠賀郡役者）として、遠賀郡川の工事を指揮することになりました。父之進は、村人の犠牲をおさえるために、村人たちが「貴船神社のたたりがある」とおそれていた「天籟」をあきらめ、一つ目をこえた西田村の「車道」の山に石切り場をつくることをおめました。

父之進は遠賀郡中郡字名の「字名」を「ノ」に変更して、工事をすすめていったと記録されています。

遠賀郡川の工事を指揮する藩士父之進（天明年間の頃）

その7 車返しの岩山を切り貫いた石工たち

遠賀郡川の天明年間近くの「車道」の南の峰に（父）という文字が刻まれています。さて、なぜ、「父」という文字が刻まれたのでしょうか？

再開された遠賀郡川の工事の一番の難所は、西田村の「車道」の山を切り貫く工事でした。

この山は切り貫く工事には、「藤夫」と呼ばれる（石工）の人たちが活躍しました。

この（石工）たちは、福岡藩の専門職で当時の天王工事の専門家でした。遠賀郡川の工事の前にも、福岡藩は川幸の平和工事、たとえば、「藤藤経石」の藤野や「茶城藤藤」の平和などを進めて来た人たちでした。しかし、「車道」のことでも、硬い岩山を ノミとツチだけで切り貫くというのは、たいへん難しい仕事でした。

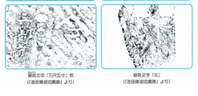
硬い岩山を打ずっていく工事のために、ノミやツチがすぐにみな くなってしまい、福岡から、藤工（鍛冶職：鉄を加工して物をつくる人）を呼び寄せ、修理をしながらの工事だったといわれています。

鉄次405メートルの岩山を切り貫くのに9年間もかかったそうです。

岩山の高さは約8メートル、深さは平均の部分から引いて深さ20メートルもあります。また、石を切り出すときに（とび切り）といって用いり法で石を切り出していく伝説などもとられています。

車道の工事のようす（伝説遠藤画）より

（工事に使った道具）



藤藤工事（ちんたい）者（伝説藤藤画）より

藤藤工事（工）（伝説藤藤画）より

その8 堀川運河の工事の完成

（車道）の切り貫きが完成すると、その上流と下流の工事も進められました。下流の工事は1762年に福岡藩に進ぼました。

上流の工事は、1780年（明治の中期）の藤藤公（藤ふさみ）に工事をつくり、遠賀川の水を遠賀郡川に長に流す水路（藤藤水）にこ とりかかりました。

遠賀川の水の勢いが強すぎて、何度試みてもまが沖れてしまいました。

水門の藤藤ひる失敗から、福岡藩は、藤井春村出身の（茂茶）に藤藤（藤山藤）の近所川につくられた井手と水門（石藤門）を藤藤することを命令しました。その頃藤をもとに、1762年、中間村藤村辺にじょうぶな水門が完成しました。

この「中間藤門」は現在も当時の場所に残っています。

ところが、中間藤門の完成後、遠賀川の水を水門に引き入れるために、遠賀川を せきとめたりしたため、上流の田畑で藤藤化が起こってしまいました。そこで、遠賀郡川は上流の藤藤まで延長されました。

そこに、（新藤藤門）がつくられました。1804年、今から約200年前のことです。

藤藤藤藤が上流を始めてから、途中の中間を進め183年の長い藤月をかけ、藤藤村から遠賀藤まで全長12.1キロメートルの遠賀郡川が一応完成しました。

「ちりんりん」と水門の完成を喜ぶ人たち（堀川ひろみより）

その9 堀川運河が宝川になった

―遠賀郡川と人々のくらし―

遠賀郡川が完成して、村の人々は農業用水を遠賀郡川から引くことができるようになりました。水に悩まされなかった天籟の村々や下流の新田開発ができた福岡や福吉などの村々では、米の取れ高が増えて、以前よりかし楽になってきました。遠賀郡の米の取れ高は、27石ほども増えたといわれています。

しかし、今まで、水不足を理由に天籟を見捨てられていた村々も福岡藩に高い年貢をおさめないといけなくなりました。また、遠賀川の洪水はなくなったわけではありませんでした。きさんなども繰り返し、起こりました。

さらに、村の人々は、遠賀や嶋・遠賀川の護岸などの修理にもかり出されました。

人々は、このようなきびしい生活を送りながらも、米を作り、遠賀郡川の水を飲み、魚をとりながら、そして、「川ひらた」の運行などで、宝を生む「宝川」となった遠賀郡川と共に少しずつ生活を高めていきました。また、遠賀郡川を守るために、「堀川護岸」がつくられ、その お かげで水を守り続けました。

そして、春と秋の二度、川ぐらいや後がりをし、遠賀郡川を大切に守りながら、250年もたくさんくしく生活 してきたのです。

堀川豆知識

- 遠賀川の水を引くことにより、田中の田畑に水が引かれました。
- 遠賀川の水は、遠賀川流域の村々に引き入れられるので、三重に分岐を つくりました。
- 遠賀川の水は、どの村にも平等になるように分岐させるようにしました。
- 遠賀川の遠賀郡は、1キロ二つの川は（ちりんりん）と言われました。
- 当時は、米量と生活費、米作りを 分けて考えること。

その10 近代化産業を支えた堀川運河

遠賀郡川が完成すると遠賀川の上流の村々から「石炭」や「作物」などが「川ひらた」という川船で運ばれるようになりました。

薫の高ちは引きに関係なく、（船頭）が石炭を運びながらできるようになると、遠賀郡川沿いの村はこともに潤されました。そして遠賀郡川沿いに町並みがつくられていきました。

宝永の終わり頃（1840年頃）になると、天籟地方では、ちいさな石炭は、この「川ひらた」に積まれ、遠賀郡川を遡れて、若松へと運ばれました。

多い年には、1万そうをこえる「川ひらた」が遠賀郡川を遡りました。

その頃（1891年）、遠賀郡が安く、しかも、石炭を運べ、大量に運べる鉄道（天籟線）が開通し、また、1908年には（新天籟）が開通しました。

いくら「川ひらた」でも、「蒸気機関車」による大量輸送には太刀打ちできず、その頃には川運しにへっていきました。

鉄道開通は13万そうを こえた「川ひらた」による石炭の輸送を激変へ、鉄道による輸送に きりかわっていってしまったのです。

そして、1938年には、とうとう、「川ひらた」は、遠賀郡川から消えこ その姿を消してしまいました。

車道（竹田市藤の川ひらた）（堀田藤藤）

堀川運河歴史年表

1617	元和3年	遠賀川大洪水
1620	元和6年	遠賀川大洪水、初代藩主 黒田長政、栗山大膳が遠賀郡の被害視察。
1621	元和7年	遠賀川第一工事のはじまり。
1623	元和9年	遠賀川第一工事の中止。
1708	宝永5年	川東の村々の人々から堀川運河工事の再開の検討が始まる。
1751	宝歴元年	正月　吉田車返の切貫の工事始まる。
1755	宝歴5年	梅雨時期から雨降りやまず国中大被害。 堀川運河開削に対する幕府からの正式な許可。
1757	宝歴7年	車返りの切貫開通。
1759	宝歴9年	車返りの川幅を3間（5.85m）から3間半に拡張される。 堀川運河車返開削工事完了
1762	宝歴12年	堀川運河第二期工事完成。
1763	宝歴13年	堀川運河で「川ひらた」通船。
1804	文化元年	堀川運河第四期工事はじまる。（1月）寿命唐戸の水門工事
1842	天保13年	堀川運河を通った「川ひらた」9,648艘
1938	昭和13年	鉄道の普及のために堀川運河の水運おわる。
2007	平成19年	近代化産業遺産認定

出展:「遠賀堀川の歴史」より